



「夢の実現」とは

先週11月14日～15日にかけて、2年生がコロナ禍を経て数年ぶりの職場体験学習に臨みました。校区内外の22の事業所で、実際に仕事をされている現場へ出向き、職務内容を体験させていただきました。



2年生のみなさんにとっては何もかも初めてのことで、緊張の連続であったと思いますが、2日間を終え、学校生活では気づかなかったことに気づいたり、自分の将来を考える大きなきっかけになったりしたのではないのでしょうか。

世の中には様々な職業がありますが、今年の夏、私が参加した会合の講演会で、「篠原洋一(しのはら よういち)」という人からお聞きした職業のお話が強く印象に残っています。講演後のQ&Aを交えて紹介します。

篠原さんは、板前になったばかりの頃に知り合った北海道大学の教授が語るオーロラの素晴らしさに強く心を打たれ、「どうしても南極へ行って自分の目でオーロラを見たい!」という一念で日本料理の修業を積んで約10年後、1991年・29歳のときによく夢が叶い、第33次南極地域観測隊の調理担当として南極での越冬を経験しました。

その後、日本の豪華客船で和食の責任者として14年間、世界一周を9回、70カ国200都市を巡るという貴重な体験を経てなお、南極への思い冷めやらず、50歳を目前にした2008年、再び第50次南極地域観測隊の調理担当として南極大陸へ向かいました。

2010年3月に南極から帰国した篠原さんは同年9月、もう一つの夢であった「自分の店を持つこと」を実現するために、横浜に旅行好きが集まるダイニングバーをオープンし、現在も南極での人気メニューなどを提供しています。

【Q1.南極の調理人になったきっかけを教えてください。】

A.食べることが大好きで、高校を卒業して板前になりました。板前になってすぐの頃、北海道大学の教授と知り合って、南極のオーロラの話を知りました。「南極の昭和基地には研究者のほかにも基地を維持する人がいるんだよ。通信隊員とかお医者さんとか、それに調理人もいるんだよ。君、チャンスあるよ。」と。そこから篠原さんは寝床にオーロラの写真と南極観測船の写真を貼って、「南極へ行くぞ!」と心に誓いました。



【Q2.南極ではどんなことを気にかけて仕事に取り組んでいましたか?】

A.隊員へのバランスのとれた安全な食事の提供。常に危険と隣り合わせなので、「絶対無事に仲間と日本に帰る」という確固たる意志を持つこと。観測隊は、2月～12月まで長期にわたり閉鎖空間の中で30人で過ごすので、お互いのコミュニケーションと声かけを大事にすること。同じ性格の人たちが一致団結してもその力は和の形でしか増やせないが、異なる性格の人たちが団結すれば積の形で大きくなる、と考えていました。

【Q3.とてつもない夢を叶えたと思いますがその秘訣は何だったのでしょうか?】

A.「とてつもない」とは思っていないんですが、小さな「あきらめない」が、大きな「あきらめない」につながるんじゃないか、と思っています。秘訣といえば、それでしょうか。

「料理職人」という職業に誇りを持ち、南極で「食」を通して仲間の命を預かる責任を果たすこと、その一方で大自然の中で感性豊かに自分の時間を過ごすという夢を両立させた篠原さんの底力を感じた講演でした。「夢の実現」のために、小さな「あきらめない」の積み重ねが大きな「あきらめない」につながる、と信じています。

保護者のみなさまへ



平素は本校教育にご協力・ご理解を賜り、誠にありがとうございます。

3年生の保護者のみなさまにおかれましては、10月31日の進路説明会に多数ご出席いただき、また、1・2年生の保護者のみなさまにつきましては、授業参観にご来校いただき、ありがとうございました。

時節柄、マイコプラズマ・コロナやインフルエンザに備え、気を抜くことなく、換気と感染予防に努めていきます。ご家庭でも引き続きご協力いただきますようお願いいたします。

※「令和6年度全国学力・学習状況調査」の本校の結果について、学校HPに掲載していますのでご覧ください。併せて「学校生活の様子」を本校ホームページ>学校生活の様子>Xより、随時アップしております。